

## お初物語

今、挾間はさま北方きたかたと上市かみいち人間を通つちよる水路が初瀬井路はっせいろじゃ。  
大井手おおいでと言うしもあるけどな。

今ん水ん取り入れ口は、庄内町いづな榎木えぎダムん中にあるんじゃ。

むかしは、榎木えぎん川ん中から水を取りよつたから、  
今でん川ん中にセキが残つちよつて、バスからこんセキが見ゆるんじゃ。

初瀬井路はっせいろは、大けな井路いろうじ 多い時にやあ九百六十五ヘクタールもん田に  
水を送りよつたと。

水路は、庄内町から挾間を通つち大分市おおくまん生石いくしまで全長ぜんちよう三十六キロメートルにも  
なるんじゃ。

\* \* \* \* \*

初瀬井路はっせいろには、とてんむげねえ話があるんじゃ。

むかし、挾間村はたいそう貧乏じのう

それつちゆうのも 米の出来が 悪かつたからじゃあ。

日頃百姓が食ぶるもんといえばあわ、ひえ、豆んじようじゃ。

米のめしなど とうてい食べられんかつた。

村ん衆は、何とかしち米がようけ採るようになりたいと思うちよつたんじゃ。

挾間村に米がようでけんのは、水が無いからじゃつた。

田植えをしてん、夏に日照りが続くと田は さらさらかわに渴かわいち ひびわれちしもうち、

年によつちやあ イネが枯れちしまうこともたびたびじゃつた。

すぐそばん大分川にやいっばい水が流れちよるのに

それを 田んぼに引き入るる事ができんのじゃ。

慶安二年けいあんの日照りひでは特にひどかつた。

田はひびわれち、せつかく苦勞しち植えた稲は枯かる寸前すんぜんじゃつた。

「うちんイネは 水がうで 枯れちしまう。水を流しちくりい！」  
「おまえんとは昨日こそ入れたじゃあねえか」

「入れたちゆうてん、ちつとうしか入れんじやった！」

「なにをゆうか！ もうおまえかた今日は入れんでいい！」

「こんちくしょう！ このわからずやが！」と

水げんかになつちしもうた。

「庄屋さん、どうか水路を 何とかしちくれんじやろうか。」と

村人衆は、当時のしもいち下市、かみいち上市、つるだ鶴田の庄屋さんのところに 掛け合いにいったんじや。

「水路を作るつちやなまやさしいことじゃねえが、府内のとのさま殿様に

お願いしちみるか・・・。」とお早速庄屋達は、殿様にお願いを出したんじや。

そんなころん府内ん殿様ちゆうのは、ひ日根野吉明とゆう

とてん情け深い殿様じやったそうな。

話を聞いた殿様は、

「水路を造れば米もたくさんできるであろう。 工事を許す。」

と おさたがあったんじや。

しかも、大山、清水ちゆう二人のぶぎよう奉行まで決めちくれたと。

さっそく水路ん工事は始まった。

今から三百五十年ほど前んことじや。

ところが、大けな障害にぶち当たったんじや。

大分川ん鬼瀬ちゆうところから水を取り

中村ん、今ん中学校ん北側まで来る所じくろかわ黒川ん谷たにを渡さなならん。

こん谷は深けえ谷で、これを渡すにやあ 川ん上に石を積つんじ

大けな土手を築かなならん。

村中総ががりじや、大人数で土手を造ったんじや。

けれど、出来上がりそうになると、大雨が降る、土手は崩くずる。

また造るとまたまた崩くずる・・・。

何べん造ってん どうしてん完成までゆかんのじや。

「こりやおかしい、どうもがてんがいかん。なんでこげえ崩るんかわけがわからん。」

「もう、殿様から言われちよる期限も迫つちよる

何とかせにやあならんぞー！」

「そうじゃあ、おほらいをあげちもらおう。」

「そうじゃあ、たたりがあるんかしれん。厄払いをしちもらおう」

「厄払いじゃ、厄払いじゃあー！」

「古野ふるの妙蓮寺みょうれんじ陰陽師おんみょうじに頼もう」

「陰陽師におほらいをあげちもらえば、崩れんようになる。」

「そうじゃあ、そうじゃあー！」と 話は決まった。

「なむさまんだあ、とうえんぎや、ぎやあてぎやあてえはらぎやあてえ

はらそうぎやあてえ・・・」とお経を上げた陰陽師は、

「これはずいぶん強い霊がたまつちよる。

霊にささげ物をしなくては ならんぞ」とゆうんじや。

「ささげ物ものちやあなんですか？」

「それはのう、怒りの神に贈り物をするんじや、

そん 送り物ちゆうのがいささかむつかしいぞ

昔からこげな強い霊にや 人柱ひとしらべを立つることにしちよる。

人柱はすべての霊を鎮めるありがてえもんじや。

そん人柱には、十三、四歳の娘が一番いいんじや。」とゆうた。

村人衆は、「人柱を立てよう そうせんと どうしてん

工事がでけん。」とささやきあうようになったんじや。

なら、人柱になるんは誰がいいんか、

村人衆は何日も考えぬいた。庄屋や陰陽師と相談したあげく、

「縦じまを着物に横じまふせを当てた着物を着ちよる子がおつたら  
そん子が人柱になる。」というこになった。

さあたいへんじやあ。

中村、上市、下市ん村ん衆は、言われたような着物を着た子を探し始めた！。そしち、ついに縦じまん着物に横じまんふせを当てた着物を着たお初ちゆうあいらしい娘を探し当てたんじゃ。

「誰がお初の家に頼みに行くんか？」

「言いにきいのう」

「そげなことゆうたち、時がたつだけじゃあ。

誰か頼みに行かんらんじやろうが」

「そげなことは誰でんわかちよる！じゃが、父親もおらん家にむげのうで 頼みに行けるか。」とおおそつごうじゃ。

「かわいそうじゃあるが、村んためじゃあ。おまえ達、組頭役五人で

行ってこい。」と庄屋に言われた組頭役たちはししぶお初の家に出かけた。

お初と母親を前に五人は代わる代わる頭を下げた。

「お初さん、すまんが村のためじゃあ、どうか人柱になっちくれまいか。」

「・・・、ああ、何でこげな事になつたんじやろう。」

なんでうちん子が。ほかにもお初と同い年の子がおるのに。

どうしち、うちのお初に白羽の矢がたつたんかええ！」

と、お初の母親は泣きくずれたと。

お初の家は、たいそう貧乏じ、父親は前の年に死んでしもうて

お初が一番上の姉で、その下に弟と妹がおつた。

母親と三人兄弟は、貧乏はしちよつたが仲良う暮らしちよつたんじゃ。

それなのに、なんでお初が人柱にならにやあなんのか。

家族のなげきは大変なもんじやつた。

じゃが、村のため、お初も家族も 泣く泣く承知したんじゃ。

さて、いよいよお初が人柱になる日が来た。

その日は、工事をする人以外は、上市の土手に誰もいけんじやつた。

あまりにお初がかわいそうじやつたからなあ。

やがて、大けな穴が掘られち、お寺の坊様んお経とともに

お初は、人柱となっち、いけられたんじゃ。

工事をする人々は、泣きながら一生懸命お初の土手に土をかけたんじゃ。

お坊様のお経を読む声だけが響く中、暗い空気が流れち、

工事はどんどん進んでいった。

お初の命を無駄にしちやならんと、みんな心をついにしちがんばつたんじゃ。

無事土手は出来上がった。

それ以後は土手が崩れることはなかったそう。

井路が完成したおかげじ、鬼瀬、向原、上市、下市、北方の田んぼには、

秋になると黄金色こがねいろの稲穂いなほが波打つようになったんじや。

お初が人柱に立って、ようようでき  
た水路じやから、  
人々は、こん井路を「初瀬井路」と呼  
ぶようになったんじや。

今でん、お初を慰なぐさむるために、お盆  
になると、お坊さんと呼んじ  
「おせがき」が行われちよるんよ。

\* 初瀬井路が完成したとき、日根野  
吉明公が詠んだ歌

「幾いくひさし 吉明よしあきらけし 初瀬川はつせがわ

流れを受けて 民たみも栄さかえん」



資料提供・・・挾間町歴史民俗資料館館長 二宮 修 二  
再 話・・・挾間町立図書館館長・ 山月 美江子  
絵 ・・・一尾 和史